



2025 年 12 月 22 日 第 62 号

# JSSH NEWS

## 日手会ニュース

発行：一般社団法人日本手外科学会  
広報渉外委員会

### 第 68 回学術集会を 振り返って

三 上 容 司

横浜労災病院 運動器センター

#### 目 次

- 第 68 回学術集会を振り返って
- 新名誉会員のご挨拶
- 新特別会員のご挨拶
- 手外科パトニリレー
- 手外科医のリスクマネジメント
- Joy の声
- リレーエッセイ
- 物故会員への追悼文
- 2025 年度各委員会委員
- 教育研修会・学術集会お知らせ
- 関連学会・研究会のお知らせ
- 編集後記

本年、日本手外科学会学術集会の会長を務めさせていただきました。酒井理事長をはじめとする学会幹部の皆さま方、そして、会員の皆様のご指導、ご支援により無事学術集会を終えることができました。まずは、この場をお借りして御礼申し上げます。

さて、第 68 回学術集会は、2025 年（令和 7 年）4 月 10 日（木曜）、11 日（金曜）花曇りの中、パシフィコ横浜ノースにて開催いたしました。学術集会のテーマは“Well-being な手外科”としました。これは、手が身体の一部ということに留まらない、人間の生き方そのものにかかわる器官であり、手外科と Well-being との関わりを考えることが重要であり、同時に手外科そのもののプレゼンスを向上させたいという願いを込めたものです。そして、このテーマに基づいて、ライフコースアプローチと領域横断的アプローチの観点から、シンポジウムをはじめとする種々の企画を立案し、準備しました。

開催形式は、現地開催をメインに一部オンデマンド配信を行うハイブリッド形式としました。会場数は、口演会場 10、ハンズオン会場 1、ワークショップ会場 1 の計 12 会場でした。参加者は、現地参加とオンデマンド参加をあわせて約 2100 名強でした。

プログラムとしては、理事長講演 1、特別講演 2、海外招待講演 3、シンポジウム 16 セッション、

パネルディスカッション 2、教育研修講演 13、Journal Club に、国際委員会企画として「Travelling Fellow のススメ」& Travelling fellow session を企画しました。また、これらに加えて、教育研修ワークショップ 2、ハンズオンセミナー 4、ランチョンセミナー 15 を開催しました。特別企画として、漫画「テノゲカ」連載から 2 年と題して、原作者と漫画家をお招きして、一般市民を交えたトークショーを開催しました。

一般演題は応募総数 569 題（国内 559、国外 10）で 519 題（国内 513、国外 6）が採用されました。採択率は国内に限ると 91.8% でした。現地での口演が 416 題でオンデマンドが 103 題でした。

また、例年通り、手の先天異常懇話会（第 63 回）、手の造形手術研究会（第 11 回）、神経因性疼痛研究会（第 22 回）を併催いたしました。

今回の学術集会では、シンポジウム、パネルディスカッションはすべて座長 2 人制とし、できるだけ女性を登用するようにいたしました。その結果、シンポ、パネルに限ると、女性座長の割合が 44% と半分近くになりました。また、一般口演などその他のセッションの座長を含めた全体からみても、女性座長の割合は 15% で従来の学術集会よりは高くなっているのではないかと思います。

今回の学術集会の運営については、参加者に“渋滞を起こさせない”ということに配慮しました。参加登録は受付で QR コードで行う、あるいは、教育研修単位は Web 上でしか申請できないようにすることにより、受付での混雑、渋滞が生じることはありませんでした。

また、フードロスを削減すべく、ランチョンの弁当の発注、配布は、学術集会運営サイドで一括して行うことにしました。当初は弁当配布時の各会場の混雑を避けるべく、中央での配布を計画していましたが、これは残念ながら会場の都合で断念せざるをえませんでした。フードロスの削減も含め、今後の課題かと思っています。

手外科の学術集会の過去を振り返りますと、東大整形外科出身者が数多く会長を務められています。直近では、2006 年長野昭先生（浜松医大）、2008 年落合直之先生（筑波大学）が会長を務められました。しかし、東大整形外科が中心になって準備を進めたのは、1969 年の津山直一先生が開催されて以来 56 年ぶりとなります。したがって、今回は、東大手の外科グループ、末梢神経グループを中心に準備を進めました。ご支援をいただいた田中栄教授をはじめとする東大整形外科の皆さま、なかでも手の外科グループ、末梢神経グループの皆さま、運営事務局である会議支援センターの皆さまに心より感謝申し上げます。本稿を閉じたいと思います。

## 新名誉会員のご挨拶

### 日本手外科学会新名誉会員に推挙されて

三 上 容 司

横浜労災病院 運動器センター



このたびは伝統ある日本手外科学会の名誉会員の称号をいただきましたこと、誠にありがとうございました。大変光栄に存じます。これもひとえに日本手外科学会の会員皆様のご指導、ご支援の賜物と感謝申し上げます。

さて、私は1977年に私立広島学院高等学校を卒業後、東京大学理科3類に入学、1983年に東京大学を卒業後、ただちに東京大学整形外科学教室に入局いたしました。ちょうど津山直一教授が退官される最後の年にあたります。当時は、現在のような初期研修制度はなく、卒業後直ちに専門診療科で研修するストレート研修の時代で、東大整形外科に入局後は、半年間の大学病院病棟研修と半年間の麻酔科研修を行い、その後市中病院整形外科で研修するというスタイルでした。この最初の半年間の大学での病棟研修の際の病棟医長が長野昭先生（浜松医大名誉教授）で、医局長が落合直之先生（筑波大学名誉教授）だったのです。そこでは、毎週のように腕神経叢損傷に対する肋間神経移行術や肩関節固定術、腱移行術、あるいは、肘部管症候群に対するKing変法といった手術が行われていました。腕神経叢損傷の長時間手術に入り、また術前のMMTの取り方から電気生理の基礎などについてご指導を受け、研修医ながら整形外科にこんな世界があるのだと気づかされた次第です。そして、1年間の研修終了後、市中病院で研修を積むうちに、週1回は大学の末梢神経診療外来へ通うようになり、1989年に大学に戻ってからは、腕神経叢損傷を中心とする末梢神経外科を専門とすることになりました。この後8年間大学に在籍し、長野昭先生、落合直之先生、沖永修二先生をはじめとする末梢神経グループの先生方にご指導いただきました。なかでも、1996年～1997年に東大分院で長野昭先生、黒島永嗣先生と過ごした1年間は末梢神経外科の臨床を学ぶ上で濃密かつ貴重な経験でした。1997年に横浜労災病院に移ってからは、整形外科全般をマネジメントする立場になりましたが、末梢神経外科、手外科というバックボーンがあったことがその支えになったと言っても過言ではありません。これも、長野昭先生、落合直之先生をはじめとする東大末梢神経診療の先生方のご指導の賜物と感謝いたしております。

日本手外科学会には1987年に入会いたしました。2006年に手の外科専門医を、2016年に指導医を取得しました。委員会活動としては、財務委員会、情報システム委員会、専門医検討委員会などで委員、あるいは委員長を務めました。また、2002年からは評議員を、2014年から4年間、矢島弘嗣理事長のもと副理事長を務めさせていただきました。そして、2025年には、第68回学術集

会を会長としてパシフィコ横浜ノースで開催させていただきました。多くのよき先輩、同輩、後輩に恵まれて、手外科にかかわる仕事ができただことは私の誇りであり、感謝の念に堪えません。この場を借りて、皆さまに御礼申し上げます。

ところで、現在の学会としての重要な課題のひとつに、日本専門医機構によるサブスペシャルティ領域認定があります。この原稿が掲載される頃には機構によるサブスペ認定が正式に決定されていることを願っています。また、その先の手外科の広告可能化、そして標榜科取得に向けて微力ではありますが、お手伝いできたらと考えております。

最後に、手外科に関わる全ての患者さん、そして、手外科医を含む医療関係者の Well-being を願って、私の御礼のごあいさつにかえさせていただきます。ありがとうございました。

## 新特別会員のご挨拶

### 日本手外科学会特別会員就任にあたって

香 月 憲 一

学園南クリニック院長



この度は伝統ある本学会の特別会員にお認めいただき誠にありがとうございます。これもひとえにこれまでご指導くださった諸先生方や研究・臨床をともにした同僚、後輩の先生方のおかげと感謝しております。

私は入局1年目に指導医である楠正敬先生の影響で手外科医を目指す様になりました。当時の楠手外科グループは人数が少ないものの若手の先生ばかりで活気にあふれておりました。グループの研究テーマは当時トピックスだった“手関節”。米国のDobyns先生、Linscheid先生、Taleisnik先生などの影響を受け、手関節のバイオメカニクスの研究に明け暮れました。日本手外科学会での初めての発表は名古屋で行われた第31回学術集会で「シネラジオグラフィによる手関節の運動解析—第3報 橈骨末端骨折—」という演題でした。初日の第1会場のしかもトップバッターで非常に緊張したのを覚えております。質問に立ってくださったのが当時の新潟大学の田島先生、京都大学の上羽先生、札幌医大の薄井先生という蒼々たる先生方でした。どのように受け答えしたのか記憶していませんが、当時注目されていた演題であったのは確かなようです。私の発表でこれほど脚光を浴びたのは後にも先にもこの演題だけではないかと思います。

その後も手関節の研究を続け、米国留学の機会も与えて頂きました。大学院生時代には短期間ですがMayo clinic、Indiana hand center、Kleinert hand center、Cambell clinic、Taleisnik先生のクリニックなどを見学させていただき、大学院卒業後もWatson先生のもとで2年間臨床に携わらせていただき多くのことを学ばせていただきました。帰国後大学の助手として2年間勤めたあと35歳の若さで国立病院の医長となり、同時に大阪市立大学手外科グループのチーフとなりました。約9年間の関連病院での勤務中に多くの後輩に恵まれてグループは発展し、個人的にはJSSH-ASSH travelling fellowに選出していただき、広島大学の砂川先生と3度目の米国留学を経験することができました。高岡教授時代に大学教員として復帰、浦島太郎の様な生活でしたが何とか5年間医局長と助教授を兼務しながら、多くの論文や学会発表もこなすことができ、米国手外科学会では賞もいただきました。最後の6年間は関連病院の大阪市立総合医療センターで、有能なスタッフに囲まれて充実した部長生活を送らせていただきました。

現在、開業医として地域医療に貢献する様になって11年が経過しましたが、30年間の手外科医としての勤務医生活がとても充実したものとなったのは、これまで一緒に働いてくださった多くの諸先生方、看護師、事務職の方々、コメディカルの方々のおかげです。紙面上ですが改めて皆様方に心より感謝申し上げます。

## 日本手外科学会特別会員に推挙されて

亀 山 真

東京都済生会 向島病院 整形外科



この度は、伝統ある日本手外科学会特別会員にご推挙頂き、誠にありがとうございます。自分に取りまして大変光栄なことであり、会員の皆様にご場を借りまして厚く御礼申し上げます。私は1985年に慶應義塾大学医学部を卒業し、直ちに同大学整形外科教室へ入局いたしました。その後、多くの諸先輩の先生方に貴重なご指導を頂き研鑽を積んで参りました。日本手外科学会には1988年の名古屋での学術集会より参加をさせていただいておりますが、初めての学会では、演者が口演とポスターの両方を準備し、それぞれで活発な質疑応答が交わされた熱気あふれる雰囲気深い感銘を受けたことを今も鮮明に覚えております。その後、イギリスのQueen Victoria Hospital, Plastic Surgery Unit、オーストラリアのRoyal North Shore Hospital, Hand and Microsurgery Unitへの留学の機会をいただき、手外科の研鑽を深めるとともに、本邦とは著しく異なる医療制度の実験を経験いたしました。1999年からは東京都済生会中央病院に赴任いたしました。当時はまだ自分が臨床で売りにできるほどの題材に乏しい状態でしたが、勤務した施設が名だたる糖尿病の専門病院であり、糖尿病を合併した腱鞘炎の症例が数多く集まっておりました。そこで糖尿病に伴う腱鞘炎の病態解明をすべく、10年間臨床研究を行い、その結果を日手会誌、Diabetes Care、Journal of Rheumatology、Journal of Hand Surgery (Am)、等に投稿しました。次の10年間は、超音波検査機器が軟部組織病変の多い手外科領域の病態解明に有用であることに注目し、これを外来診療の場に設置し、そこで得られた知見を、本学会を通じて報告し、臨床応用の有用性を広く共有してまいりました。学会の委員会活動では社会保険等委員会に参加し、2016年から4年間にわたり委員長を拝命し「手外科における保険診療」の講演を行いました。そこでは隔年で行われる診療報酬改定の結果を示し、さらに手外科領域の診療報酬が他分野に比べて冷遇されていることの対策として、診療報酬点数表の中の「複数手術に係る費用の特例」、「指に関わる同一手術野の範囲」の記載内容の活用が有効であることを、具体例を示しながら発信いたしました。なお、委員長としての活動中に、エピレナミン入りリドカインの手指領域への適応禁忌の解除を、厚労省と度重なる面談の末に達成できたことは、現在のWALANTの繁栄をみるに大変意義深いことに関わったものと思っております。当時ご協力をいただきました委員、担当理事の諸先生方にはこの場を借りまして深く感謝申し上げます。末筆ながら、日本手外科学会の益々のご発展を心より祈念して、御礼の言葉とさせていただきます。



## 新特別会員のご挨拶

和田 卓 郎

北海道済生会 小樽病院 整形外科



このたび特別会員としてご授与いただき、大変うれしく思い、名誉なことと感じております。酒井理事長をはじめ関係の皆様へ心より御礼申し上げます。

専門医試験委員会、役員選挙管理委員会、国際委員会の3つの委員会で委員長を務めさせていただきました。専門医試験委員会では初代委員長として第1回専門医試験の立ち上げに関わりました。国際委員会では2015年3月、ハワイのマウイ島で開催された日米合同手外科会議のゴルフトーナメントの日本側幹事を務めさせていただきました。ともに良い思い出です。

最も印象に残るのは、2014年4月に金谷文則先生が沖縄で主催された第57回学術集会前日の代議員総会。もめにもめた役員（理事）選挙の選挙管理委員会委員長を務めたことです。理事の選出は事前調整のうえ、総会で承認されるのが慣例で、実際に選挙が行われたことは過去にありません。当時、日手会では新専門医制度における整形・形成のサブスペシャリティ診療科の承認を目指していました。1名であった形成外科理事を3名に増員することが専認構の意向でしたが、事前調整がつかず、総会が紛糾しました。私は選挙管理委員会委員長として、制度変更の必要性について説明をさせていただいたのですが、会場から集中砲火を浴び、針の筵状態でした。ついに選挙が実施されました。

しかし、会場の代議員数と投票数が合わないという前代未聞の事態を起こしてしまいました。壇上の落合理事長からは「ばかやろう！なにやってるんだ！」とお叱りをいただく羽目になり、まさに「進退窮まる」という言葉を身をもって実感しました。幸い、委員の皆様が獅子奮迅の働きで、再投票を行い、何とか任務を全うしました。終了したのは、確か21時を過ぎていたと記憶しています。学会を主催した琉球大学の皆様には多大なるご迷惑をおかけしました。この場を借りてお詫び申し上げます。

振り返ってみると、この“もめにもめた”選挙で、理事の顔ぶれが一新され、新しい日本手外科学会の扉が押し開かれたように思います。日手会の発展に少なからず貢献できたのではないかと、感じております。

地方の中小病院の院長になって8年が過ぎました。整形外科の臨床・研究・教育は織田崇先生に一任し、私は多くの時間を経営に費やしています。当院に集う若い整形外科医たちが手外科を志すよう導くことが、今の私にできる手外科への貢献と考えています。

このたびの特別会員授与を励みに、今後も微力ながら学会の発展に尽力してまいります。本当にありがとうございました

## 第15回 手外科バトンリレー 恩師，津下健哉先生

水 関 隆 也

広島県総合リハビリテーションセンター名誉所長

津下健哉先生は1985年から1994年の10年間、所長として広島県障害者リハビリテーションセンター（現、広島県総合リハビリテーションセンター）に奉職された。私は当時、広島大学整形外科主任教授生田義和先生から、津下先生のお手伝い（いわゆるカバン持ち）をする様にとの命を受け、1986年10月からリハセンターに赴任した。

以来、朝6:30に津下先生のご自宅まで私の車で迎えに行き、夕7:30に所長室からご自宅までお送りするという運転手に始まって、手術の助手、外来、入院患者の調整、海外出張への随行、広島手の外科講習会の準備、英文手紙の代筆、等々公私にわたりお手伝いをさせていただいた（図1）。この間、津下先生の医師としての生き方のみならず、人としてのあるべき姿を学ばせていただいた。特に送迎の往復の2時間は私にとっては津下先生と二人だけの時間を独占するという貴重な時間になった。この時間、大部分は寡黙でおられたが、時々喋られることがあった。

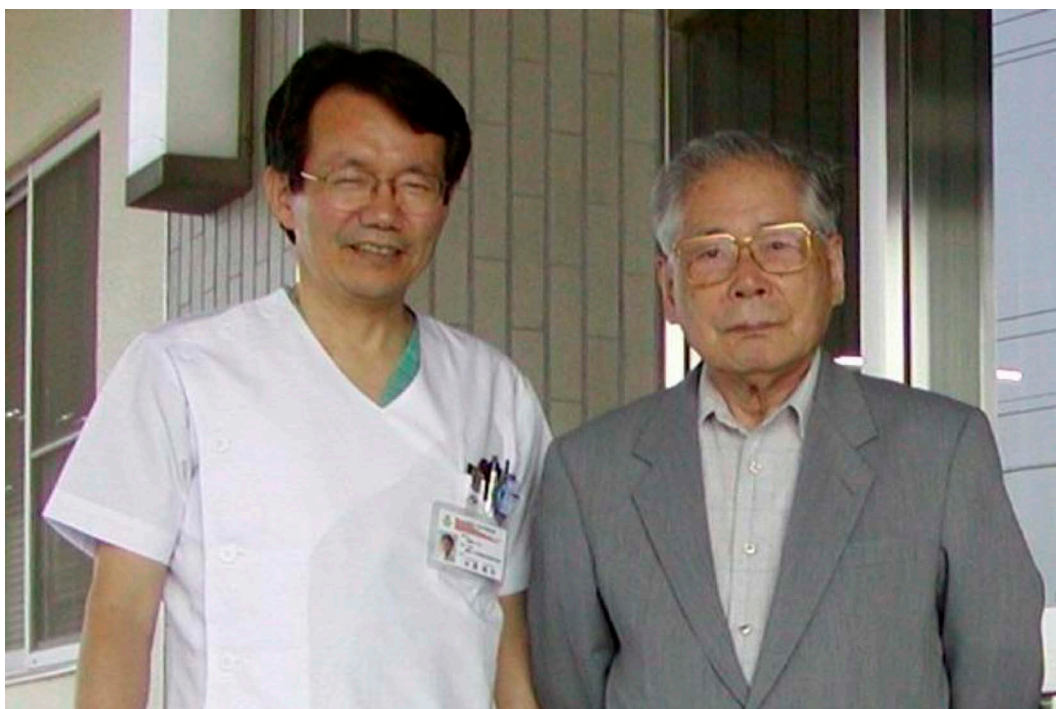


図1. 恩師，津下健哉先生と（2004年6月23日）



本稿では、この様な日常の中で教わった津下先生らしい「教え」をいくつか紹介したい。

## 一症例ずつを大切に

津下先生の代表的名著に「手の外科の実際」と「私の手の外科」があるが、その中で描かれているシェーマは全て、津下先生自身の手によることはよく知られている。その元となる原画は手術中に撮影したスライド写真とメモで埋め尽くされた手書きの症例カードにあった。

津下先生が自ら執刀した1万例を超える症例とそれに付随するスライド写真は所長室に鎮座していた。驚くべきは1例1例の手術記録を個々のカードに記録して残されて保管されていたことだ。カードはB6版くらいの大ききで周辺にパンチ穴が開いており、この穴に千枚通しの様なものを差し替えれば、手術年月日、疾患分類、手術術式分類別に選別された症例カードがふり落とされる仕組みだった。現代風にいえば Database の様なものであった。カードに記された内容は手書きの図譜が主で周辺にメモ風のコメントが書かれていた。この記録と写真が著書に結実した。

## 一生涯の勉強

「医者というものは、生きてる間はずっと勉強せねばならんのよ」時々おっしゃった言葉である。平易な言葉であるが、ともすれば怠惰な方向に流れ勝ちな我々凡人には、厳しい戒めの言葉として響いた。

津下先生は晩年まで各種研究会や日手会総会へ参加されていた。特に日手会の会期中はずっと会場に留まり、熱心に発表をお聞きになっておられた。時々、演者に質問もされていた。学会の翌週、お迎えの車の中では、「水関君、何かおもしろい発表はありましたか？」と尋ねられるのが常で、よく話題になった一つに最小侵襲手術がある。津下先生は基本的に最小侵襲手術には反対の立場であった（図2）。「何であんなに皮膚切開の広さにこだわるのかね？十分な切開の方が正確に安全にできるのに...」

端的な例が後外側アプローチを用いた肘手術である。関節鏡視下手術が未だ普及していなかった当時は、肘の滑膜切除術や関節症に対する Debridement には病変部位を直視下に広く正確に処理できる後側方アプローチが最も合理的方法であった。しかし、上腕三頭筋の尺骨付着部を骨膜下に剥離せねばならないという難しい操作があり、残念ながらあまり広く普及しなかった。

## Simple is best

もう一つの先生の口癖に「Simple is best」（図2）という言葉がある。手指の骨折には、近年の手外科手術機器の発展により導入された細かな螺子、薄いプレートを用いた固定が流行りであるが、正確で強固な固定を得るために手術時間が必要以上に長くなったりする。すると軟部組織を虐め、瘢痕を招来して拘縮を来すこととなり、何のために手術をしたのか分からない結果となる。むしろ Kirshner 鋼線でアライメントを整えるだけの方がいいことがある。冗長な手術を戒める言葉だった。

## 部下の指導

送迎の車中で忘れられない会話の一つに、若い研修医の指導の方法についてのものがある。私は津下先生が「手術の技は教えてもらうのではなく、盗み取るもんなんですよ」との持論をお持ちな

# 手術は如何にすべきか？ 組織の微小循環を大切に

組織への思いやり。組織の気持ちを考える。  
組織の圧挫、細胞死は瘢痕を作る。化膿は絶対防止  
手術での諸悪の根源は瘢痕である。止血を確実に  
切開は必要十分、手術瘢痕には品格を。  
手技はSimple is best

## 鬼手佛心⇒佛手佛心

最近最小侵襲なる言葉が使用されるが、90年前Bunnellにより報告されたAtraumatic手技なる論文も一度読んで戴きたい。



図2. 第59回日手会，津下健哉先生の特別講演のスライド原稿から。津下先生は不慮の事故のため自らの講演が叶わず，生田先生が代講された。「組織を思いやる気持ち」「切開は必要にして十分に」「手技は Simple is best」との持論を披露された。

ことは分かっておりながら，敢えて「先生，今の若い先生達は機会を与えないと（技術を教えないと）ついてきませんよ，もう少し彼らに執刀の機会を増やしてやれませんか」とお願いしたことがあった。その後，リハセンターでは研修医が執刀する機会が増えたが，津下先生の信念は基本的に変わらなかった。

## いつメスを置く？

津下先生が所長現役の頃は自ら執刀医としてメスを握っておられた。我々は最後まで津下先生のテクニックに魅せられ続けた。特に腱移行術の腱の緊張の取り方，Dupuytren 拘縮の腱膜切除時のメスと鉗の使い分け等，コツを盗み取ることはなかなか容易ではなかった。まだまだ手術を見せていただきましたかった。

その後，土谷病院の手外科研究所に移られた。それ以降は自らメスを執らないで，木森先生の手術ビデオを撮り，それを編集する仕事に専従されていた。何故にメスを置かれたか？さすがにその理由は最後まで聞くことはかなわなかった。その時，御年73歳。私もその歳を過ぎた今，いつメスを置くべきかと迷っている。

津下先生のカバン持ちを卒業して30余年が過ぎ去った今，当時を回想しながら，あらためて恩師，津下健哉先生の偉大さを噛み締めている。

## 予期していない異状検査所見への対応

若 林 良 明

横浜市立みなと赤十字病院 整形外科

昨今、CT や MRI に映り込んでいた異状所見や読影結果を見落とししたり、失念したりして、後日病状が悪化してから検査時の対応の不備について謝罪するようなニュースをよく目にする。手外科領域では腕神経叢などを除くと体幹の画像検査を行う機会は少ないため、このような事態に陥る頻度は高くないが、放射線科読影レポートや病理診断レポートに記載された異状所見に対応する必要がある際に、適切な初動がとれないと不幸な結果を招くことになりかねない。遠い過去の話になるが、関連施設にて手指基節骨の骨吸収性病変として骨腫瘍を掻爬し人工骨を移植した手術の際、担当医は内軟骨腫と思い込んでいたが、術後の X 線で急速に人工骨が吸収されていくため「何か変だな」と思い、「そういえば」と病理診断レポートを見返した結果、悪性腫瘍であったことを遅れて把握したケースがあった。最近では電子カルテの機能や、病院の安全意識も向上し、このようなケースを未然に防ぐ複数の対策が講じられていることが多い。①読影・病理レポートの「未読」を検査オーダー医師と安全管理者に通知する電子カルテ機能、②検査オーダーの診断名と異なる所見があった際に、結果の重大性に応じたフラッグをレポートにたてる電子カルテ機能や、診断医から臨床担当医へ連絡する院内連絡の取り決め、③異状所見に対峙した担当医がすぐにアクションを起こす時間がないときに、複数の医師と「To Do」を共有してそのまま失念してしまうことを防ぐ電子カルテ機能などが挙げられる。電子カルテの機能に依存する部分はリプレースの時にしか対応できないが、少なくとも複数の手段を取り決めておくべきで、異状データを手にしたときにとるべきアクションを、あらかじめ自院・自科の若手の先生まで浸透させておくことが重要である。血糖値や血液凝固データなどの採血結果の異常値への対応も同様で、筆者自身、APTT 延長に気づかずに肘関節授動術を行った際に止血困難となり、後に軽症血友病が潜在していたことが判明したという苦い経験がある。APTT 延長は血友病の他、von Willebrand 病、高リン脂質抗体症候群などの合併が疑われ、それぞれ対応も生じる合併症も異なるため、術前検査で異状を認めた際には、術前に内科にコンサルトする基本を徹底することが重要である。

橈骨遠位端骨折は脆弱性骨折の初発骨折とされ、骨粗鬆症の検査が行われることが多くなってきた。検査率・治療開始率/継続率を上げる試みは非常に重要だが、注意すべきはセットやパスで骨密度検査を自動的に行うような体制を築いた結果、骨粗鬆症治療を開始すべき骨密度であるのに、

これを看過して治療を提案せずに骨折の治療だけに注力した結果、後日別の二次骨折を起こした際に、防ぎ得た骨折であったと損害賠償等を訴求されるようなケースが今後出てくるのではないかという点である。骨粗鬆症のガイドラインも10年ぶりに改訂され、治療開始基準や推奨される治療、治療による骨折リスクの低減効果も提示されるようになったため、盲目的に検査のみ行って必要な治療を開始せずにいることは、患者が二次骨折を受傷するリスクのみならず、治療機会を奪われたと訴訟になるリスクまで考えておかねばなるまい。

## 第12回 Joyの声

牛尾 茂子

共立蒲原総合病院 整形外科

この度JOYの声のバトンをいただき、お話しさせていただける場をくださりありがとうございます。私は、少数精鋭集団である手外科医の中でもさらに希少種である形成手外科医の立場からお話しさせていただきます。

### ～医局入局から手外科医になるまで～

私は岡山大学形成外科学教室の新卒入局者第一号で、当時の教授は光嶋勲先生でした。皮膚科の1コマが光嶋先生の授業で、まさに運命の出会いでした。入局時は一般的な形成外科というよりは、手外科の外傷や組織再建術など、常にマイクロサージャリーに触れていたという環境でした。外科系研修から戻ってきた時の卒後3年目の時の“ラットのDIEP flapを生着させられるまでは臨床に出さない”というシビアなマイクロトレーニングのおかげで、マイクロに対する苦手意識は全くなかったように思います。粉瘤を取るよりも切断指再接着の方がうまいという皮肉な若手形成外科医



画像1：仙台医療センター形成外科・手外科の鳥谷部荘八先生とガッチリ握手



でした。

その後紆余曲折あり、卒後6年目に東北大学形成外科学教室に入局させていただき、卒後10年目に形成外科専門医を取得し、耳の外科・手外科班への正式な配属となりました。一般形成外科医から手外科医へポイントが切り替わった瞬間でした。

当時の指導医は現仙台医療センター形成外科・手外科の鳥谷部荘八先生でした。鳥谷部先生は当時より見事なコーチングで若手を導いていらっしゃいました。怒られた記憶はありません。形成外科専門医を取得して1年後に手の外科班ごと仙台医療センター形成外科に移管され、衰退していた仙台医療センター形成外科の立て直しと、乱れ打たれる数々の外傷症例に立ち向かいながら、鳥谷部先生の多大なるご協力もあり、手外科専門医は卒後13年目に取得できました。症例集めには全く困らなかったですが、手関節より近位領域の勉強は困難でした。よく専門医試験をパスできたなと、今でも不思議に思います。

### ～手外科専門医を取得してから～

縁あって、2021年より四谷メディカルキューブの平瀬雄一先生のもと、更年期手を中心にした手外科診療にあたらせてもらいました。手は機能だけでなく整容面も重要であることを実感しました。形成外科医で良かったとつくづく思いました。また、みなさん決まって骨粗鬆症でした。手の知識だけでは限界があると痛感しました。この時の経験がきっかけで、2024年より整形外科のトレーニングを開始しました。溢れんばかりの大腿骨近位部骨折と脊椎圧迫骨折を経験し、力（腕力）不足を痛感し、更年期の自分にはかなり辛く、いかに手外科が今の自分にベストマッチなのかを実感しました。

### ～これからの手外科医のために～

“手”ひとつ取っても、外傷や先天異常や変性疾患と様々あり、人それぞれのニーズにあった働き方のできる領域ではないかと思います。できるなら、やっぱり専門医は取っておいた方が、希少種ですからどこに行っても重宝されます。取りたくても取れない方が結構いて、学会が総力をあげ



画像2：共立蒲原病院骨折予防チームの皆さんと

て医局の垣根を超えて連携をとり、取得の意欲がある方へのバックアップ体勢を整えることが急務  
と思います。また、指導サイドのコーチング技術の向上も必須と考えます。背中は何も語ってくれ  
ませんし、愛のムチ（暴力）などもっての外です。

加えて、これは自分の実感ですが、一度体に染み込んだ技術は、数年ブランクがあっても必ず取  
り戻せます。それぞれの人生のステージで、やむなくキャリアを中断しないといけない時期があっ  
ても、情熱を失わなければいつでも戻って来られます。

戻る側は勇気を振り絞って戻ってきます。受け入れ側がしっかり受け止める体制を整えておくこ  
とが、専門医・指導医・学会の仕事であると強く思います。

“やってみせ 言って聞かせて させてみて 褒めてやらねば 人は動かじ  
話し合い 耳を傾け 承認し 任せてやらねば 人は育たず  
やっている 姿を感謝で 見守って 信頼せねば 人は実らず”

山本 五十六

## 第6回 手肘の人工関節における 3次元術前計画の正確性の検討

松 尾 知 樹

慶應義塾大学 整形外科  
荻窪病院 整形外科 手外科センター

人工肘関節（TEA）や人工手関節（TWA）は、他の人工関節と比較して、まだ未完成な点が多い。両者とも適応となる疾患は限られており、合併症率や再手術率も依然として高い。再手術に至るとその難度は高く、術後成績も不良である。

TEA や TWA において術後合併症や再手術をなるべく低減するためにはどのような工夫が必要だろうか。TEA の loosening の risk factor としては、手術手技（特にセメントテクニック）、設置不良、若年、関節リウマチなどが挙げられているが、我々が介入できるのは手術手技と設置位置である。特に、TEA や TWA に関しては、他の人工関節と異なり、3次元術前計画に関する報告は少なく、最適なインプラント設置位置とその術前計画の正確性は不明であった。

我々は TEA、TWA に対し、画像解析ソフト ZedEdit（LEXI 社）を使用して術前計画を行ってきており、その正確性（再現性）を検討した。TEA では K-NOW の unlinked type、TWA では DARTS（ともにナカシマヘルスフォース社）を用いた。術前 CT およびインプラントデータから 3次元モデルを作成し、自由に移動、回転、回旋して、我々の考える術前計画に基づいてインプラントを設置した。インプラントは、リウマチ患者の現在の短縮した軟部バランスの状態を維持しつつ、骨軸に沿うように設置した。回旋についてはバイオメカニクス研究も参考にして、TEA 上腕骨コンポーネントは上腕骨顆部関節面に平行に設置、尺骨コンポーネントは上腕骨コンポーネントの顆部に平行に設置し、TWA 手根骨コンポーネントは第3中手骨基部の背側面に平行に設置、橈骨コンポーネントは橈骨遠位部の掌側骨皮質に平行に設置した。その設置位置に対してパラメータを数か所設定し長さを測定、術中にそのパラメータを反映させて、骨切り、骨孔作成、ラスピング、インプラント設置した。術後 CT を撮像し、術前計画に対する術後インプラントの設置誤差を計測した。

結果として、特にインプラントの回旋の設置誤差が非常に大きいことがわかった。多くがリウマチ患者であり、骨・関節形態が複雑で術前計画の術中への反映が難しかったことや、手術アプローチや術者-患者肢位的位置関係による影響などが原因であると考えられた（Matsuo T, et al. J Hand Surg Eur Vol. 2023; 48(5) :476-478. / Matsuo T, et al. J Hand Surg Asian Pac Vol. 2024;29(5): 397-407.）。他の人工関節でも回旋設置誤差が臨床成績に影響しうるとされているこ

とから、我々が今回検出した手肘の人工関節の回旋設置誤差についても同様に、長期的に臨床成績に影響する可能性が示唆された。

我々はさらに、独自開発した Augmented Reality を術中支援デバイスとして使用することで、その回旋設置誤差の問題が解決できる可能性を検証しており、TEA や TWA 以外も含めた多くの整形外科手術においても有効であると感じている。

繰り返しになるが、手肘の人工関節はまだ未完成である。そもそも現在のインプラントデザイン自体にも改良の余地があるかもしれない。また現在のインプラントの中でも最大限の工夫により、多くの手肘の難治例をより安全に救うことができるかもしれない。引き続き技術革新とその検証を継続していきたい。

# 物故会員への追悼文

## 恩師 矢部 裕名誉会員を偲んで

慶友整形外科病院 堀 内 行 雄



矢部 裕 会員

2025年3月12日、慶應義塾大学名誉教授矢部 裕先生が92歳で生涯を終えられました。先生は、慶應義塾大学では整形外科学教室主任教授、慶應義塾大学病院長としても活躍し、多くの功績を残され、多くの後輩を育てられました。特に専門の「手の外科」に関しては、慶大におけるその礎を強固なものにし日本手外科学会や東日本手外科研究会などの発展にも尽力されました。

去る6月7日、慶大整形外科主任教授中村雅也葬儀委員長のもと、慶大北里講堂で教室葬が厳かに行われました。教室内外から200名を超える多くの皆様にご会葬いただきました。特に友人代表として弔辞をいただいた上羽康夫名誉会員をはじめ、遠方からも多くの日本手外科学会並びに日本整形外科学会の重鎮の先生方にご参列いただきました。教室同門を代表して心より厚く御礼を申し上げます。

矢部先生は、1932年埼玉県でお生まれになり、県立浦和高校を経て慶大医学部卒業後、整形外科学教室に進み、「手の外科」を志望されました。岡山県国立療養所長島愛生園で2年間、津下健哉先生から麻痺手治療を学び、更に1969年から当時の国際的な「手の外科」を実際に学ぶためにテネシー大学キャンベルクリニック Milford 教授のもとに留学されました。帰室後、慶大整形外科学教室運営委員長などを務めた後、1972年に名古屋保健衛生大学（現藤田医科大学）医学部整形外科初代教授として着任し、整形外科教室の開講を主導され、約13年8か月間、務められました。初代教授としての役目を果たされた後、1986年8月母校の慶大整形外科教授に就任されました。

帰室当時は全国的な大学紛争、医学部改革の混乱のまだ収まらない中、先生は「和と伝統と研究」を重視する基本方針を掲げ、更なる整形外科教室の教育・研究・臨床体制の確立と発展にご尽力されました。苦勞の甲斐あって、整形外科教室内はさらに充実して行き、医学部や病院もあるべき姿を取り戻していきました。これらの多くの問題を粘り強く解決しながら、多くの業績を積み重ねていかれました。

矢部教授就任当時、慶大手の外科班には内西兼一郎専任講師、伊藤恵康、堀内行雄が大学病院に勤務しており、井口傑、小川清久も大学に勤務していました。その他、岡 義範、石黒 隆、佐々木 孝、田崎憲一、根本孝一、高山真一郎、浦部忠久、鈴木克侍（以上敬称略）ほか多くの優秀な人材が関



連病院で手外科臨床や研究を行っていました。当時は全国的に「手の外科」の人気は高く、慶大手の外科班に登録されていた人数は同年の新年会では約 80 名を数えました。矢部教授が戻って来られてから臨床・研究面はさらに充実し、現在では肩関節を含めた「上肢班」として佐藤和毅慶大スポーツ医学総合スポーツセンター教授並びに岩本卓士整形外科准教授を中心に臨床、研究に頑張っており、上肢班新年会の名簿は 200 名を超す大きなグループに成長しています。

矢部教授は、徐々に重要な任務が多くなり極めて多忙のため、外来や手術は、かなり制限されていました。しかし、外来診療をしたり、回診をしたり、手術をしているときの矢部先生はとても楽しそうで、キラキラした目の輝きを感じました。矢部先生は「手の外科のこと」をお話になるときワクワクする気持ちになると申され、それを「ときめき」という言葉で表現されていました。

矢部先生の手術は極めて丁寧かつ繊細であり、「矢部法」とも言われるいくつかの手術法も考案されました。先天性橈尺骨癒合症に対する肘筋による再癒合防止法、陈旧性指 PIP 関節脱臼骨折に対する治療法、藤田医科大における末梢神経縫合に関する Selective funicular suture 法などがありますが、中でも母指形成不全（ぶらぶら母指）に対し 5 本指を残す母指形成術は有名で主に国立成育医療研究センターを中心に今も継承されています。いずれも、臨床医として困られて工夫を重ねて考案した矢部先生らしい、素晴らしいものばかりです。

矢部教授は整形外科全般の臨床のみならず基礎的な研究にもさらに力を入れ、医工連携や基礎医学との融合を図ることに尽力されました。平成元年から大学院生を採用し、基礎研究の充実を図りました。大学院の第一期生は中村俊康君で TFCC の機能解剖に関する研究を行い、第 2 期生の井幡巖君は国立精神神経研究所で高坂新一部長（現 国立精神・神経医療研究センター神経研究所名誉所長）の指導を受けミクログリア特異遺伝子の解析研究から、IBA1 を登録してその後の機能解明に貢献した。その後も多くの大学院生が活躍し多くの成果を上げました。

学会活動においても、関係する多くの学会の発展・向上に努め、慶大教授任期中に日手会や日整会など、以下の 7 つの学術集會会長も務められました。

1988.2 第 2 回東日本手の外科学会学術集會、1988.11 第 17 回関東整形外科災害外科学会学術集會、1990.5 第 33 回日本手の外科学会学術集會、1994.2 第 6 回日本肘関節研究会学術集會、1994.7 第 5 回日本末梢神経研究会学術集會、1996.4 第 69 回日本整形外科学会学術集會、1997.11 第 8 回日本臨床スポーツ医学会学術集會のすべての学術集會を皆様のおかげで、成功裡に終えることが出来ました。

これらの学会の中で、特に第 33 回日本手の外科学会学術集會では、麻痺上肢の機能再建と末梢神経再生を主題とし、Milford 名誉教授と新潟大田島達也名誉教授による「日本手の外科学会」のあり方をめぐる特別講演はその後の学会のあり方に対する宿題提起として極めて意義のあるものとなりました。

1998 年 3 月に教授を退任し、4 月から公務員共済組合立川病院病院長に就任し 10 年間務められました。

1997 年「手の外科に関する臨床的・基礎的研究」で慶應義塾賞を受賞し、平成 24 年には瑞宝中綬章を受章されました。また、IFSSH のパイオニアにもなられました。

先生は、ご逝去された 92 歳までご家族に支えられ、健康寿命を全うされました。特に教授時代には休むことなく、全速力で走り続けられ、多くの業績を積み上げられ幸せな人生を送られました。

こよなく「手の外科」を愛され、日本のみならず世界の「手の外科」の発展を心から願われ、最後まで温かい思いやりを持ってご指導いただいた先生へ感謝の気持ちを込め、今後も先生の教えを守っていくこととお約束し、心からのご冥福をお祈りします。合掌！



# 故 落合直之先生を偲んで

横浜労災病院 運動器センター 三 上 容 司

落合直之先生は埼玉県立浦和高等学校をご卒業後、東京大学に入学され1973年9月に東京大学医学部医学科をご卒業されました。卒業が通常と異なり9月だったのは、当時わが国を席卷した大学紛争の影響とうかがっています。その後、東大で研修医として過ごされた後、都立豊島病院、湯河原厚生年金病院で研修された後、1977年から1年間、米国のJefferson Medical College of Thomas Jefferson Universityに留学されました。帰国後は、1983年に東大整形外科医局長、1986年に東大分院整形外科講師、1989年から東大整形外科講師をお務めになりました。その後、いったん1992年に関東通信病院に移られた後、1997年より筑波大学に移られ、1999年から筑波大学整形外科教授をお務めになりました。2012年に筑波大学を退職後は、キッコーマン総合病院にて臨床医としてご勤務を続けられました。そんな中、忍び寄る病魔に果敢に挑まれた先生でしたが、闘病のかいなく2025年2月25日、77歳という惜しまれる年齢でご逝去されました。ここに、心より哀悼の意を表します。

私と落合先生との出会いは、私が東大整形外科に入局した1983年にさかのぼります。当時、落合先生は医局長をお務めで、われわれ新入局員の指導にあたられていました。新入医局員への訓示で、「君たちはもう学生ではないのだから、時間を厳守しなければならない。そういう時には車を使わず電車を使うべし。」と言われたことをよく覚えています。謹厳実直、ありていに言えば、ずいぶん厳しそうな先生だなというのが初対面での印象でした。

その後、私が末梢神経診に所属してからは、よき先輩、師匠、指導者として公私にわたり大変お世話になりました。私が1990年に助手として大学に戻った際には落合先生は病棟医長をお務めで、あらゆる手術にフル稼働されていました。当時の黒川高秀教授の片腕として、手外科、末梢神経外科にとどまらない仕事ぶりで、まさに八面六臂のご活躍でした。

1990年代、正確な日時は覚えていませんが、落合先生の出張手術のお伴で小生の郷里近くの病院まで一緒させていただいたことがありました。腕神経叢損傷患者の手術だったのですが、病院に着くなり患者を診察し、針筋電図を行った後、手術になったのには正直驚きました。診断をゆるがせにしない先生の厳しい一面を垣間見た思いでした。また、手術の際は、大学での手術とはちがって、ずいぶんリラックスされていました。この時に、「先生の手術は安心してみていられる。」と言われて、ずいぶんうれしかったのを覚えています。大学で拝見するのはまた違う一面を垣間見た気がしました。

学会活動でも大変お世話になりました。2010年に末梢神経学会の理事を退任する際に小生を後任の理事として推薦して下さったこと、その際、小生のために熱弁を振るわれたことを、のちに、同席していた他の理事からうかがった時には胸が熱くなりました。また、日本手外科学会で理事長をされていた時の理事選挙での毅然とした仕切りは今も鮮明に覚えています。専門医制度の確立に向けて、会員の考えが必ずしも一様ではなかったことが混乱の原因でした。この理事選挙後、手外

科学会は一丸となって専門医制度の確立に向かうことになります。重大なターニングポイントを差配されたその功績を忘れることはできません。

臨床、研究、学会活動とは別に、プライベート、特にゴルフでお付き合いいただきました。飛ばしにこだわり、スコアにこだわる、常に真剣勝負のそのプレイスタイルは、一緒にプレーしたことがある方は皆さんご存じだと思います。ドラコンを取り、コンペで優勝した際のひかえめながらもうれしそうな表情、スコアをたたいてしまいやや釈然としない表情など、今でも鮮明に覚えています。

落合先生に最後にお会いしたのは、2024年2月の東日本手外科学会での晩餐会の席です。体調がすぐれない中、落合先生は奥様を伴い出席されました。ごあいさつに席までうかがうと、2025年4月に第68回の学術集会を担当する予定であった小生に対して、手外科学会の開催ががんばれ、楽しみにしていると、激励されました。どこまでも、厳しくも温かく優しい先輩であり師匠でした。

心よりご冥福をお祈りいたします。

# 2025 年度 各委員会委員

(五十音順・敬称略)

## ●常設委員会

### 財務委員会

担 当 理 事	田 尻 康 人						
委 員 長	森 崎 裕						
委 員	宇佐美 聡	四 宮 陸 雄	富 田 一 誠	蜂須賀 裕 己			
	柳 林 聡	吉 田 進 二					
オブザーバー	西 田 圭一郎						

### 教育研修・オンラインマガジン運用委員会

担 当 理 事	森 谷 浩 治						
委 員 長	小 野 真 平						
委 員	安 部 幸 雄	岩 倉 菜穂子	織 田 崇	金 城 養 典			
	河 野 友 祐	黒 田 拓 馬	兒 玉 祥 博	齋 藤 太 晃			
	鈴 木 実佳子	竹 内 実知子	丸 山 真 博	森 田 晃 造			
アドバイザー	小 笹 泰 宏						
オブザーバー	佐々木 薫						

### 編集・用語委員会

担 当 理 事	池 口 良 輔						
委 員 長	土 田 真 嗣						
委 員	乾 淳 幸 祐	岩 小 本 卓 士	大久保 宏 貴	大 佐 谷 和 裕			
	河 野 友 祐	蘭 川 直 哉	齋 藤 太 一 拓	高 野 木 信 史			
	下 江 隆 司	助 多 田 武 進	鈴 辻 平 丸	高 棚 廣 横			
	高 松 聖 仁 久	鍋 島 末 田	丸 山 明 真	藤 目 智 博			
	那 須 義 雄 一 郎	松 吉 良					
アドバイザー	松 井 史 郎						
	吉 小 田 良						

### 機能評価委員会

担 当 理 事	五 谷 寛 之						
委 員 長	志 村 治 彦						
委 員	飯 塚 照 史	越 後 歩	花 香 恵	藤 目 智 博			
	渡 邊 忠 良						
アドバイザー	金 内 ゆみ子						

### 国際委員会

担 当 理 事	佐 藤 和 毅
委 員 長	多 田 薫



委 員	岩 月 克 之	上 村 卓 也	宇 佐 美	聡	河 村 真 吾
	兒 玉 祥 哉	菅 沼 省 吾	鈴 木 田	拓 二	高 木 岳 彦
	長 尾 聡 史	中 島 祐 介	藤 田 浩		丸 山 真 雄
アドバイザー	吉 市 原 理 俊	柿 木 良 介	金 谷 文 則		善 家 雄 吉

#### 広報渉外委員会

担 当 理 事	佐 竹 寛 史				
委 員 長	堂 後 隆 彦				
委 員	市 原 理 司	佐々木 規 博	西 脇 正 夫	藤 田 浩 二	
アドバイザー	中 宮 崎 洋 一				

#### 社会保険等委員会

担 当 理 事	服 部 泰 典				
委 員 長	三 浦 俊 樹				
委 員	亀 山 真 明	木 村 洋 朗	兒 玉 祥	中 山 政 憲	
アドバイザー	宮 本 英 将	依 田 拓 也			

#### 先天異常委員会

担 当 理 事	鳥谷部 莊 八				
委 員 長	西 村 礼 司				
委 員	今 泉 督 子	上 里 涼 子	柿 崎 潤	高 木 岳 彦	
アドバイザー	仲宗根 素 晋	根 本 竹 寛 史			

#### 倫理利益相反委員会

担 当 理 事	鳥谷部 莊 八			
委 員 長	楠 原 廣 久			
委 員	佐々木 信 幸	中 尾 悦 宏		
アドバイザー	辻 本 律 義			
アドバイザー(外部)	塚 田 敬 美			
外 部 委 員	山 我 美 佳			

#### 学術研究プロジェクト委員会

担 当 理 事	松 田 健				
委 員 長	佐 藤 光 太朗				
委 員	今 田 英 明	岡 崎 真 人	岡 田 充 弘	岡 本 秀 貴	金 香 司
	金 谷 貴 子	久 保 和 史	児 玉 素 大	小 高 木 誠	
	櫻 庭 聖 仁	佐 野 裕 己	園 内 大 輔		
アドバイザー	加 地 良 雄	蜂 須 賀			

### 専門医制度委員会

担 当 理 事	山 本 美知郎								
委 員 長	河 村 健 二								
委 員	岡 久仁洋	金 谷 耕 平	栗 本 秀	櫻 庭 実					
	助 川 浩 士	中 島 祐 子	林 原 雅 子	原 庭 実					
	藤 原 浩 芳	古 川 洋 志	井 雅 子						
アドバイザー	田 中 克 己	西 田 圭一郎	吉 井 雅 子						

### 専門医資格認定委員会・施設認定委員会

担 当 理 事	橋 本 一 郎								
委 員 長	河 野 正 明								
委 員	岩 川 紘 子	金 谷 貴 子	齋 藤 太 一	高 木 信 介					
	藤 井 裕 子	松 井 雄 一	松 本 泰 一	本 宮 真 正					
アドバイザー	齊 藤 晋	中 尾 悦 宏	長谷川 健二郎	森 田 哲 正					

### 専門医試験委員会

担 当 理 事	松 田 健								
委 員 長	佐々木 薫								
委 員	赤 羽 美 香	石 河 利 広	今 泉 督	大久保 宏 貴					
	奥 井 伸 幸 士	幸 田 久 男 憲	河 村 真 慎 二	白 幡 本 英 明					
	助 川 浩 士	中 山 政 憲	檜 崎 慎 二	宮 本 英 明					
アドバイザー	依 田 拓 也 之	内 藤 聖 人	山 崎 宏						

### カリキュラム委員会

担 当 理 事	佐 竹 寛 史								
委 員 長	田 鹿 毅								
委 員	乾 淳 幸 靖	金 城 養 典 央	河 村 太 介	下 江 隆 司					
	長 沼	鍋 島							

### 情報システム委員会

担 当 理 事	池 口 良 輔								
委 員 長	松 浦 佑 介								
委 員	鎌 田 雄 策 人	堀 内 孝 一	本 宮 真	吉 井 雄 一					
アドバイザー	田 尻 康 人	村 瀬 剛							

### キャリアアップ委員会

担 当 理 事	原 友 紀								
委 員 長	仲宗根 素 子								
委 員	赤 羽 美 香	有 光 小百合	岩 川 紘 子	大久保 ありさ					
	大 田 智 美	白 幡 毅 士	古 庄 寛 子	柳 林 聡					
	山 本 宗一郎								
アドバイザー	長 田 龍 介	新 関 祐 美	日比野 直 仁						

### 定款等検討委員会

担 当 理 事	川 崎 恵 吉																			
委 員 長	前 田 和 洋																			
委 員	岩 川 紘 子	太 田 英 之	加 地 良 雄	金 谷 耕 平																
	坂 本 相 哲	佐 々 木 信 幸	平 川 明 弘	村 田 景 一																
	森 田 晃 造																			
アドバイザー	上 原 浩 介																			

### 手外科専門医検討委員会

担 当 理 事	原 友 紀																			
委 員 長	若 林 良 明																			
委 員	上 原 浩 介	佐 々 木 薫	田 中 克 己	吉 田 史 郎																
アドバイザー	三 上 容 司																			

### 将来展望戦略委員会

担 当 理 事	橋 本 一 郎																			
委 員 長	建 部 将 広																			
委 員	川 野 健 一	高 木 誠 司	建 部 将 広	若 林 良 明																
アドバイザー	篠 原 孝 明	平 田 仁	山 本 真 一																	

### 橈骨遠位端骨折診療ガイドライン策定委員会

担 当 理 事	森 谷 浩 治																			
委 員 長	西 脇 正 夫																			
委 員	市 原 理 司	檜 山 尚 弘	坂 千 葉 なつみ	坂 本 相 哲																
	鈴 木 大 介	檜 崎 慎 二	山 口 恭 平	長 尾 聡 哉																
仲 拓 磨	中 山 健 太 朗	松 浦 佑 介	山 口 幸 之 助																	
山 崎 宏	米 田 英 正																			
作成協力者	上 原 浩 介	黒 田 拓 馬	高 橋 洋 平	簡 井 完 明																
	松 田 匡 弘																			
アドバイザー	安 部 幸 雄	今 谷 潤 也																		

### 2029APFSSH（アジア太平洋手外科学会連合）誘致委員会

担 当 理 事	佐 藤 和 毅																			
委 員 長	中 村 俊 康																			
副 委 員 長	佐 藤 和 毅																			
委 員	秋 田 鐘 弼	岩 月 克 之	宇 佐 美 聡	鈴 木 拓 子																
	善 家 雄 吉	多 田 浩 二	長 尾 聡 哉	中 島 祐 子																
	西 村 誠 次	藤 田 浩 二																		
監 事	柿 木 良 介	金 谷 文 則																		

## 監 事 紹 介

島 田 賢 一      西 浦 康 正

## 教育研修会・学術集会お知らせ

### ◆ 2025 年度教育研修会◆

会 期：2026 年 1 月 20 日（火）～ 3 月 20 日（金）  
会 場：WEB 開催（オンデマンド配信）  
詳 細：<https://jssh-2025.c-cloud.co.jp>（準備中）

.....

### ◆ 第 69 回日本手外科学会学術集会◆

会 期：2026 年 4 月 9 日（木）～ 10 日（金）  
会 場：ホテルニューオータニ博多・電気ビル（共創館・本館）  
会 長：副島 修（福岡山王病院 整形外科）  
詳 細：<https://www.congre.co.jp/69jssh/>

.....

## 関連学会・研究会のお知らせ

### ◆ 第 43 回中部日本手外科研究会◆

会 期：2026 年 1 月 24 日（土）  
会 場：岡山コンベンションセンター  
会 長：西田 圭一郎（岡山大学病院運動器疼痛センター）  
詳 細：<https://www.kwcs.jp/cjssh43/>

.....

### ◆ 第 47 回九州手外科研究会◆

会 期：2026 年 1 月 31 日（土）  
会 場：久留米シティプラザ 3 階 久留米座  
会 長：吉田 史郎（久留米大学医学部整形外科学講座）  
詳 細：<https://www.jssh.or.jp/doctor/khand/index.html>

.....

◆第 40 回東日本手外科研究会◆

会 期：2026 年 2 月 11 日（水・祝）  
会 場：仙台国際センター  
会 長：鳥谷部 莊八（仙台医療センター形成外科手外科 東北ハンドサージャリーセンター）  
詳 細：<https://www.congre.co.jp/ejssh40/>

.....

◆第 38 回日本肘関節学会学術集会◆

会 期：2026 年 3 月 13 日（金）～ 14 日（土）  
会 場：京都テルサ  
会 長：伊藤 宣（倉敷中央病院 整形外科）  
詳 細：<https://cs-oto3.com/elbow2026/>

.....

◆第 38 回日本ハンドセラピィ学会学術集会◆

会 期：2026 年 4 月 11 日（土）～ 12 日（日）  
会 場：博多国際展示場&カンファレンスセンター  
会 長：山田 玄太（愛野記念病院）  
詳 細：<https://38jhts.com/>

.....

◆第 69 回日本形成外科学会総会・学術集会◆

会 期：2026 年 4 月 22 日（水）～ 24 日（金）  
会 場：あわぎんホール（徳島県郷土文化会館）  
会 長：橋本 一郎（徳島大学医学部形成外科学）  
詳 細：<https://convention.jtbcom.co.jp/jsprs69/>

.....

◆第 99 回日本整形外科学会学術総会◆

会 期：2026 年 5 月 21 日（木）～ 24 日（日）  
会 場：神戸コンベンションセンター  
会 長：田中 栄（東京大学医学部整形外科学講座）  
詳 細：<https://www.congre.co.jp/joa2026/>

.....

◆第 37 回日本末梢神経学会学術集会◆

会 期：2026 年 9 月 25 日（金）～ 26 日（土）  
会 場：ホテルブエナビスタ  
会 長：関島 良樹（信州大学脳神経内科、リウマチ・膠原病内科）  
詳 細：<https://gakkai-e.jp/jpns2026/>（準備中）

.....



◆第41回日本整形外科学会基礎学術集会◆

会 期：2026 年 10 月 15 日（木）～ 16 日（金）  
会 場：長良川国際会議場  
会 長：秋山 治彦（岐阜大学医学部整形外科学教室）  
詳 細：準備中

.....

◆第35回日本形成外科学会基礎学術集会◆

会 期：2026 年 12 月 17 日（木）～ 18 日（金）  
会 場：那覇文化芸術劇場 なはーと  
会 長：松村 一（東京医科大学形成外科）  
詳 細：準備中

.....

◆第53回日本マイクロサージャリー学会学術集会◆

会 期：2026 年 11 月 26 日（木）～ 27 日（金）  
会 場：京都テルサ  
会 長：池口 良輔（京都大学医学部付属病院 整形外科）  
詳 細：準備中

.....

◆第37回日本小児整形外科学会学術集会◆

会 期：2026 年 11 月 19 日（木）～ 20 日（金）  
会 場：江陽グランドホテル  
会 長：落合 達宏（宮城県立こども病院 整形外科）  
詳 細：準備中

.....

---

## 編 集 後 記

---

日手会ニュース第 62 号をお届けいたします。

巻頭の振り返りにある第 68 回学術集会のテーマ「Well-being な手外科」は、技術の研鑽だけでなく、医師としての在り方を深く考えさせられるものでした。特に今号の「手外科バトンリレー」で紹介された津下健哉先生の教えには、襟を正される思いがいたしました。私自身、かつて短い期間ではございましたが津下先生の元で学ばせていただく幸運に恵まれました。先生の真摯な姿勢に触れたあの日々が、現在の手外科医としての私の礎となっております。また、矢部裕先生、落合直之先生という本学会の巨星への追悼文からは、お二人が遺された功績の大きさを改めて痛感いたしました。偉大な師たちを偲びつつも、私たちは常に前を向いて歩まねばなりません。本号で紹介されたりスクマネジメントの意識改革や、3D 技術を駆使した術前計画など、臨床現場は日々進化しています。先人の教えを礎としつつ、こうした新しいテーマにも真摯に取り組み、手外科医療をさらに発展させていくこと。その一歩ずつの積み重ねこそが、私たちの明日を切り拓くと確信しております。

(文責：東京科学大学 藤田浩二)

---

### 広報渉外委員会

(担当理事：佐竹寛史、委員長：堂後隆彦、委員：市原理司、佐々木規博、西脇正夫、藤田浩二、宮崎洋一、アドバイザー：中川夏子)